

努め、さらにこれらの検査体系を確立しより多くの件数を処理し、子宮癌による死亡率を低下せしめる様努力すべきであると考えられる。

### 130. 子宮頸癌の組織呼吸及び解糖作用に及ぼすステロイドホルモンの影響について

(鹿児島大) 前田 宣久, 森 一郎

#### 1) 研究目的

子宮体癌のステロイドホルモン療法は、今日ようやく臨床応用の段階に達したが、子宮頸癌のこれらについてはなんら決定的な報告をみない。

そこでわれわれは、子宮頸癌組織を用い、癌組織に特有な呼吸および解糖作用の面から、ステロイドホルモンの影響を観察した。

#### 2) 研究方法

組織の酸素消費量は Warburg 検圧計を用い、糖消費量は Hagedorn-jensen 法、乳酸発生量は Barker-summerson 法、pHの変化は Quin-hydrion 法で測定し、子宮頸癌と正常子宮頸管内膜について対比した。

#### 3) 研究結果

子宮頸癌の組織呼吸は estradiol では低濃度において若干促進、estriol では高濃度において促進がみとめられた。

解糖作用は estradiol, estriol では亢進するものが多かった。

androgen および progesterone では組織呼吸は抑制されたが、解糖作用には大した変化は、みとめられなかつた。

### 131. リンパ系造影法に関する2つの問題点

(島根雲南共存) 伊藤 義徳

(岡山大)

橋本 清, 平林 光司, 高田 茂

(研究目的) 現在、リンパ系造影法の臨床的有用性についてはほぼ結論がえられている。しかし、リンパ節造影法が癌転移を促進せしめるか、否か、および本法で証明された根治手術後のリンパ節遺残が果して予後にどのような影響を与えるかについては不明である。

この2つの問題点について検討を加えた。

〔研究方法〕転移促進の可能性については、動物実験および臨床例の両面から検討を加えた。5年前にリンパ系造影法を行なつた約140例の子宮頸癌患者について、予後、再発の状態を行なわなかつた約200例の対照群と比較した。また、家兎辜丸に Brown Pearce 腫瘍を移植し、腹腔リンパ節転移を形成した後、リンパ節造影法

を行ない、胸管よりえられたリンパ液を検索、および他家兎へ移植し転移形成の有無を追求した。一方、根治手術後のリンパ節遺残については、82例について5年予後を追求し、リンパ節転移の有無、遺残の有無との関係を求めた。

〔研究結果〕家兎実験では、リンパ系造影法により明らかに胸管内リンパ液に腫瘍細胞の出現増加を認め、10例中1例に他家兎辜丸への移植が成立した。臨床例については目下検討中。遺残と予後との関係は、明らかに認められ、リンパ節摘除の重要性、後照射の徹底化の必要性を痛感せしめる結果をえた。

### 132. 子宮頸癌における各種術後分類案の検討

(岡山大) 橋本 清, 平林 光司

石川 洋三, 橋本 威郎

〔研究目的〕1960年に示された日産婦学会案をはじめとして、現在までに報告された長崎大、信州大、岡山大案および Meigs 分類を当教室で検索した計、750例にあてはめ、各分類案の特徴および妥当性を検討する。手術療法が主体をなす日本において術後分類に関する国際的案が提唱されてもよい時期と考えられるからである。

〔研究方法〕昭和31年より38年までに岡山産婦人科教室へ入院加療し、術後別出標本についての組織学的検索が完了し、かつ5年間の予後が明瞭な約750例を素材とした。組織標本作製方法は既報の通りである。検査事項は、癌の傍組織浸潤、腔壁浸潤、リンパ節浸潤CPL分類および5年予後である。

〔研究結果〕Meigs 分類および日産婦学会案はすべての症例を包含しえて且つ、簡明であるが予後推定、術後照射の設定等において、組織検査を行なう労力にみあうだけの価値は見出されない。長崎大の予後指数および信州大案はともにすぐれた分類案であることを認めた。岡大案は主としてリンパ節転移を中心にした分類案であり、癌の空間的拡りによつて分類したものであるが、われわれは生物学的特性はよく、この空間的拡りによつて表現されているという考えを強くした。

### 133. 腫瘍細胞の放射線効果と核酸の動静

(神戸大)

松浦 役児, 三浦 徹, 下村 禎宏

北野 紀夫, 長谷川和男, 東条 伸平

1) 研究目的: 放射線が腫瘍細胞の核酸合成および分解にどのように影響をおよぼしているかを検索し、また腫瘍細胞の病理形態学的な変化との関連性についても検討した。